

本論文は大学教員が実施する研究指導の効果を指導学生の研究成果の成長への貢献として定量化した。そのために学生の研究成果を指導教員の「質」と関連づけるセミパラメトリック付加価値モデルを導入し、研究指導の「質」の下限を推定した。本稿では教員の研究指導効果を識別するために、定年退職・異動・死亡などを原因とする教員の離職に着目する。教員が離職すると、学生の研究指導は別の教員に引き継がれる。そのために教員離職が発生した研究室では修士課程と博士課程の指導教員は異なる。一方、教員離職が発生する前の世代の研究室では、修士課程と博士課程の研究指導は同一教員により実施される。このような研究指導環境の世代間の相違を擬似的な対照実験とみなすことで、教員離職による研究指導の「質」の変化が学生の研究成果の成長に与える影響を識別した。実証分析では、東京大学理学研究科で学位を取得した物理学研究者を対象に、その指導教員の研究指導効果を計測した。推計結果から、大学教員の研究指導は指導学生の研究業績の成長に無視できない影響を及ぼすことが示唆されている。具体的には、教員の研究指導の「質」が 1 標準偏差上昇すると指導を受ける博士学生の研究業績は少なくとも 0.51 標準偏差上昇することが明らかになった。